「代名詞的副詞」の統語範疇について

人　見　明　宏

0. 序

「代名詞的副詞」または「代名副詞」(Pronominaladverb) とは、「da(r)-、hier- もしくは wo(r)- と特定の前置詞が結合した副詞である」と言われる[1)]。そして、具体的には以下の語が「代名詞的副詞」に属している (Dudenband 4.－Die Grammatik (2005) S. 586)。

daran	darauf	daraus	dabei	dadurch
dafür	dagegen	dahinter	darin / darein	
damit	danach	daneben	darüber	darum
darunter	davon	davor	dazu	dazwischen

代名詞 (人称代名詞もしくは指示代名詞) は、それが人を表す名詞を受ける場合は前置詞と代名詞が用いられるが、事物を表す名詞を受ける場合は「代名詞的副詞」が用いられる。以下の例 (1) で、a の前置詞と (定冠詞を伴った) 名詞から成る auf den Lehrer に対しては、b の前置詞と人称代名詞から成る auf ihn が用いられるが、(2) で、a の前置詞と (定冠詞を伴った) 名詞から成る auf den Zug に対しては、b の「代名詞的副詞」darauf が用いられる。

(1) a. Ich warte **auf den Lehrer**. 前置詞＋名詞
　　b. Ich warte **auf ihn**. 前置詞＋人称代名詞
(2) a. Ich warte **auf den Zug**. 前置詞＋名詞
　　b. Ich warte **darauf**. 「代名詞的副詞」

上の例で、動詞 warten の前置詞格目的語を、(1) では前置詞句が担っているのに対し、(2) では前置詞句および「代名詞的副詞」が担っている。

ここで問題となるのが、「代名詞的副詞」は副詞句を形成するが、副詞句は前置詞格目的語としては用いられないということである。

本論文では、「代名詞的副詞」の統語範疇（品詞と句範疇）に関して、まず品詞を主に形態的特徴と統語的特徴から確認する。次にその句範疇を統語機能と統語構造から明らかにする。その際、統語構造に対しては、依存関係文法の理論に基づいて考察する。

1．品詞の分類基準

語は、伝統的に次の10の品詞に分類される[2)]。

動詞	名詞	代名詞	冠詞	形容詞
副詞	前置詞	接続詞	数詞	間投詞

ただし数詞と間投詞は、統語論上あまり問題とされず、また本論文の内容とも関連性が極めて薄いので、この二つの品詞に関してはこれ以上立ち入ることはしない。

そして語は、形態的特徴、統語的特徴、意味的特徴[3)]などから、各品詞に分類される。ドイツ語の場合、伝統的な8つの品詞の分類基準として、以下の形態的特徴と統語的特徴が一般的に用いられる[4)]。

a. 屈折可能
b. 活用可能
c. 曲用可能
d. 比較変化可能
e. 単独で文肢を形成
f. 冠詞との共起可能
g. 格支配可能

次に各分類基準を満たしている品詞について概観する。

a. 屈折可能な品詞は、動詞、名詞、代名詞、冠詞、形容詞である。
b. 活用可能な品詞は、動詞のみである。
c. 曲用可能な品詞は、名詞、代名詞、冠詞、形容詞である。
d. 比較変化可能な品詞は形容詞である[5)]。
e. 単独で文肢を形成する品詞は、名詞、代名詞、形容詞、副詞である[6)]。

f. 冠詞との共起可能な品詞は、名詞のみである。
g. 格支配可能な品詞は、動詞と前置詞である[7)]。

以上の概観をまとめたものが、次の表である。以下の表で、＋は基準を満たしていることを、－は基準を満たしていないことを示す[8)]。

	動詞	名詞	代名詞	冠詞	形容詞	副詞	前置詞	接続詞
屈折可能	＋	＋	＋	＋	＋	－	－	－
活用可能	＋	－	－	－	－	－	－	－
曲用可能	－	＋	＋	＋	＋	－	－	－
比較変化可能	－	－	－	－	＋	－	－	－
単独で文肢を形成	－	＋	＋	－	＋	＋	－	－
冠詞との共起可能	－	＋	－	－	－	－	－	－
格支配可能	＋	－	－	－	－	－	＋	－

2.「代名詞的副詞」の品詞

ここでは、1 で概観した品詞の分類基準を「代名詞的副詞」に適用する。そして、「代名詞的副詞」の形態的、および統語的特徴と副詞のそれらが一致するのかを考察する。

品詞の分類基準のうち、まず「a. 屈折可能」という基準は、「代名詞的副詞」は満たしていない。また「b. 活用可能」「c. 曲用可能」「d. 比較変化可能」という基準も同様に満たしていない。

次に「e. 単独で文肢を形成」に関しては、以下の例 (3) を見ても、「代名詞的副詞」はこの基準を完全に満たしている。

(3) a. Wartest du auf den Zug?
b. Ja, **darauf** warte ich.

また基準「f. 冠詞との共起可能」に関しても、次の例 (4) では、これを満たしているように見える。

(4) a. Wem gehört das Wörterbuch auf dem Tisch?
b. **Das darauf** gehört mir.

しかし、(4)b の Das は定冠詞ではなく、(das Wörterbuch を受けている) 指示代名詞である。またこの darauf は指示代名詞に対する付加語として用いられており、単に指示代名詞のみの Das gehört mir. だけで文法的な文として成立し、実際にはこちらのほうが通常用いられる。したがって、「代名詞的副詞」はこの基準「f. 冠詞との共起可能」を満たしてはいない。

最後に、「代名詞的副詞」は特定の格を支配することはなく、基準「g. 格支配可能」も満たしてはいない。

したがって、「代名詞的副詞」は、品詞の分類基準のうち「e. 単独で文肢を形成」のみを満たしており、他の基準はどれも満たしていない。この点で、「代名詞的副詞」の形態的、および統語的特徴は、副詞のそれらと一致しており、従来の品詞分類においては副詞に分類されているのである。

3.「代名詞的副詞」の統語機能

統語範疇には、語のレベルの品詞と句のレベルの句範疇とがある。2では、語の範疇である品詞の点で「代名詞的副詞」を考察したが、以下では、「代名詞的副詞」の句範疇について考察する。

特定の品詞は単独、もしくは (通常その前後にある) 他の語句と共に句を形成する。句の中心を成す語は主要部と呼ばれ、句は主要部の性質を引き継ぐ。例えば、冠詞、形容詞、名詞の 3 語から構成されている die schöne Frau は、人称代名詞 sie で代入可能であり、名詞の性質を有しているので、名詞句であり、その主要部は名詞 Frau である。「代名詞的副詞」は、2で見てきたように、品詞としては副詞に分類される。副詞は句の主要部となれる品詞であり、「代名詞的副詞」は副詞句を形成することになる。しかし、「代名詞的副詞」は前置詞と代名詞の融合形である。前置詞も句の主要部となれる品詞であり、その点では「代名詞的副詞」は前置詞句であるとも言える。このように、「代名詞的副詞」の句範疇は副詞句もしくは前置詞句の二つの可能性があり、他の主要部を形成する品詞とは異なり、単純にその句範疇を一つに決定することができないのである。

そこで、ここでは、「代名詞的副詞」の句範疇を考察するにあたり、ま

ずその統語機能を調べることにする。句は、その句が用いられている文中での働きに応じて、主語、目的語などの統語機能を担う。ある統語機能は、特定の句範疇しか担うことができないため[9]、統語機能から句範疇を判断することができる。

「代名詞的副詞」の統語機能を考察する際に、比較の対象となるのが副詞句と前置詞句である。すでに述べたように、副詞[10]と前置詞は、句の主要部となる品詞であり、句範疇としてそれぞれ副詞句と前置詞句を形成する。そこで、副詞句、前置詞句および句としての「代名詞的副詞」の統語機能を調べていくことにする。

副詞句が担う統語機能は、副詞的規定語（状況語）と付加語[11]である[12]。

(5) Das Hotel steht **dort**.（副詞的規定語）
(6) Das Hotel **dort** ist luxuriös.（付加語）

前置詞句の統語機能は、副詞的規定語、付加語および前置詞格目的語である[13]。

(7) Das Hotel steht **neben dem Rathaus**.（副詞的規定語）
(8) Das Hotel **neben dem Rathaus** ist luxuriös.（付加語）
(9) Ich warte **auf den Zug**.（前置詞格目的語）

「代名詞的副詞」の句としての統語機能は、前置詞句のそれと同じく、副詞的規定語、付加語および前置詞格目的語である。

(10) Das Hotel steht **daneben**.（副詞的規定語）
(11) Das Hotel **daneben** ist luxuriös.（付加語）
(12) Ich wartet **darauf**.（前置詞格目的語）

ここで問題となるのが、副詞句は前置詞格目的語としては用いられないのに対して、「代名詞的副詞」は前置詞格目的語として用いられることである。以下の例 (13) の auf den Zug は、a にある hier などの副詞に書き換えることはできない。

(13) Ich warte **auf den Zug**.

↛ a. Ich warte **hier**. (副詞句)

→ b. Ich warte **darauf**. (「代名詞的副詞」)

以上の考察をまとめたのが、次の表である。

	副詞的規定語	付加語	前置詞格目的語
副詞句	+	+	−
前置詞句	+	+	+
「代名詞的副詞」	+	+	+

副詞句には、前置詞格目的語という統語機能はない。もちろん、副詞は前置詞句の主要部にはなれず、前置詞句を形成することもない。「代名詞的副詞」は品詞としては副詞に分類され、その点では副詞句を形成する。しかしこれは、前置詞句と同じく、前置詞格目的語という統語機能を担っている。したがって、統語機能から判断すると、「代名詞的副詞」は、副詞句ではなく、前置詞句に分類されることになる。

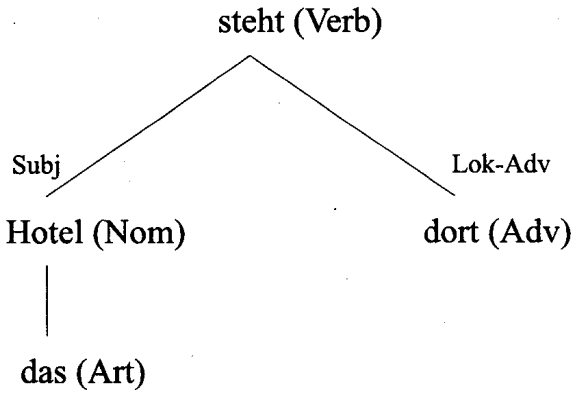
4. 依存関係文法から見た「代名詞的副詞」

句範疇に関して「代名詞的副詞」は、主要部の品詞から判断すると副詞句に、統語機能から判断すると前置詞句に分類されてしまう。この点を解決するためには、依存関係文法の理論に基づく考察が有効であると思われる。以下では、副詞的規定語、付加語および前置詞格目的語として用いられた「代名詞的副詞」を依存関係文法の観点から分析・考察する。その際、副詞句および前置詞句を比較の対象とする。

4.1. 副詞的規定語

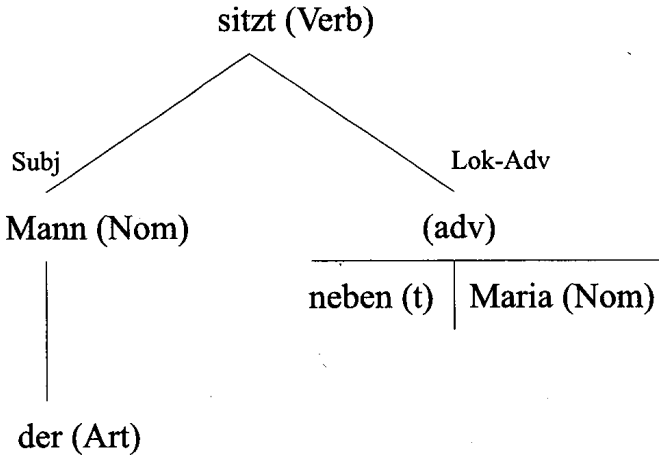
まず、副詞的規定語として用いられた副詞句を考察する。以下の (14) では、副詞句の主要部である副詞 (Adv) dort は動詞 (Verb) stehen[14] に直接依存している。なお、この副詞句の統語機能は場所の副詞的規定語 (Lok-Adv) である[15]。

(14) Das Hotel steht dort.

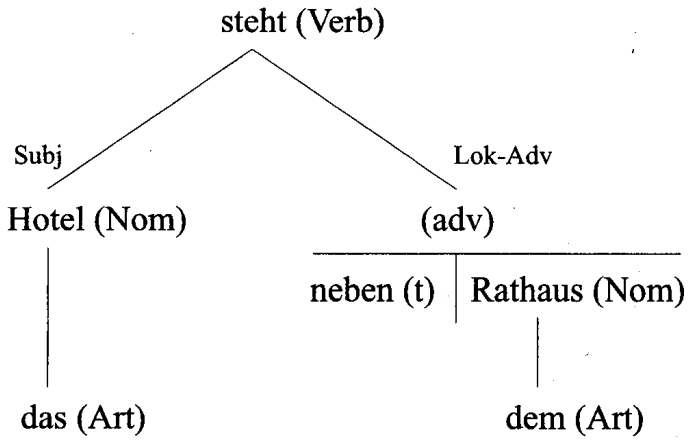


前置詞句では、前置詞と共に用いられているのが名詞である場合と、代名詞である場合に分けて考察する。まず、共に用いられているのが名詞の場合、その名詞が表すのが人であっても、事物であっても、両者の統語構造に差異はない。また、副詞的規定語として用いられた前置詞句の場合、Lucien Tesnière の依存関係文法では、変換（Translation）が生じていると考える（人見 (2007) S. 327)。(15) では名詞 Maria が、(16) では名詞 Rathaus が変換詞 (t) である前置詞 neben と結びつくことによって、副詞相当語句 (adv) に変換される。そしてこの副詞相当語句が動詞 sitzen に依存している。

(15) Der Mann sitzt neben Maria.

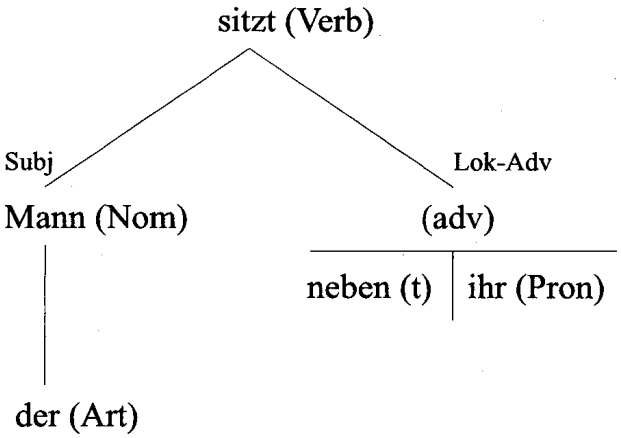


(16) Das Hotel steht neben dem Rathaus.



次に、前置詞が代名詞と共に用いられる際は、その代名詞が人を表す名詞を受けているのか、事物を表す名詞を受けているのかに分けて考察する。まず、人を表す代名詞の場合、前置詞と共に名詞が用いられた (15) および (16) の場合と基本的には同じ統語構造を示す。(17) では、代名詞 (Pron) ihr が変換詞である前置詞 neben と結びつくことによって、副詞相当語句に変換され、この副詞相当語句が動詞 sitzen に依存している。

(17) (Der Mann sitzt neben Maria. →) Der Mann sitzt neben ihr.

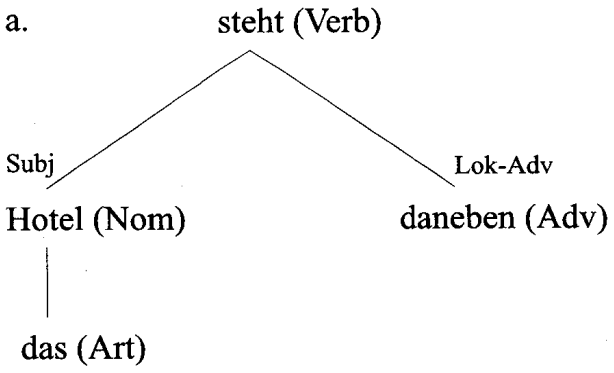


一方、事物を表す代名詞と前置詞に対しては、「代名詞的副詞」が用いられる。この場合は、以下の二つの統語構造が考えられよう。まず一つは、(14) と同じく、副詞 daneben が動詞 stehen に直接依存している (18)a の統語構造である。この場合は、変換は生じていない。もう一つは、前置詞と

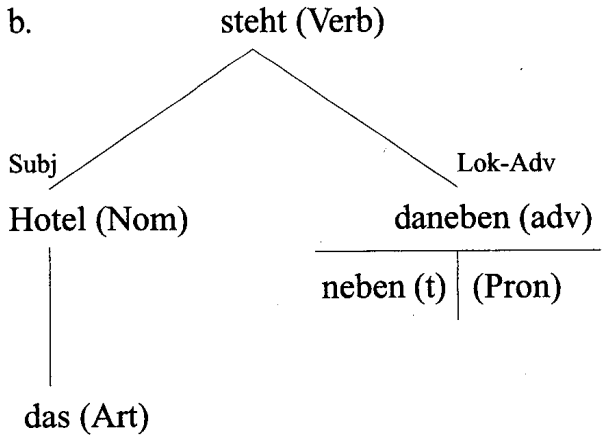
人を表す代名詞から成る前置詞句 (17) と同じ統語構造を示す、(18)b である。この場合は、(17) と同様に変換が生じている。ただし、代名詞 ihr と変換詞である前置詞 neben が結びついている (17) とは異なり、(18)b の場合は、具体的な代名詞が文には生起していない。そのため、本論文においては、樹形図では単に (Pron) とのみ記載することにする。そして、これが neben と結びついて副詞相当語句に変換され、daneben という形態で文に生起することを表している。

(18) (Das Hotel steht neben dem Rathaus. →) Das Hotel steht daneben.

(18) a.



(18) b.



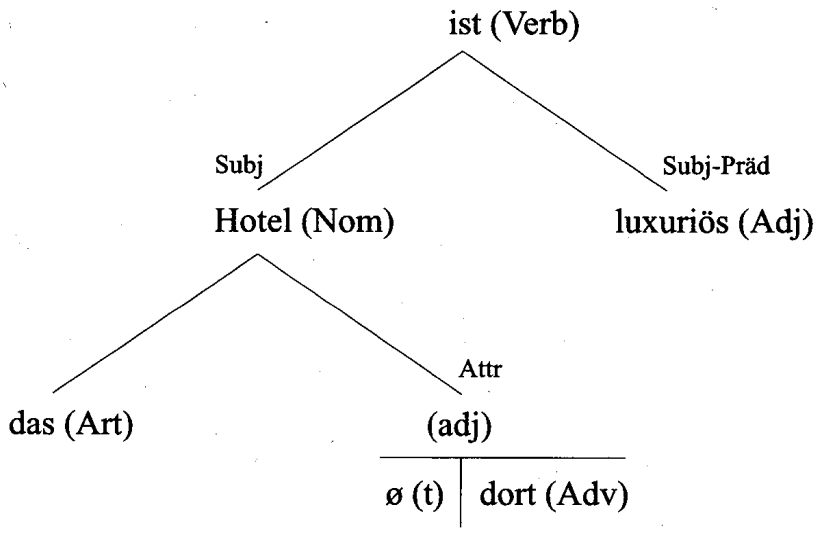
このように、副詞的規定語として用いられた、句としての「代名詞的副詞」の場合、(18)a と b の二つの統語構造が考えられるが、このうちのどちらが正しい統語構造を示しているのかは、現時点ではまだ判断することができない。

4.2. 付加語

付加語として用いられた副詞句、前置詞句および句としての「代名詞的副詞」に関しては、副詞的規定語として用いられたそれらの場合と事情は異ならない。

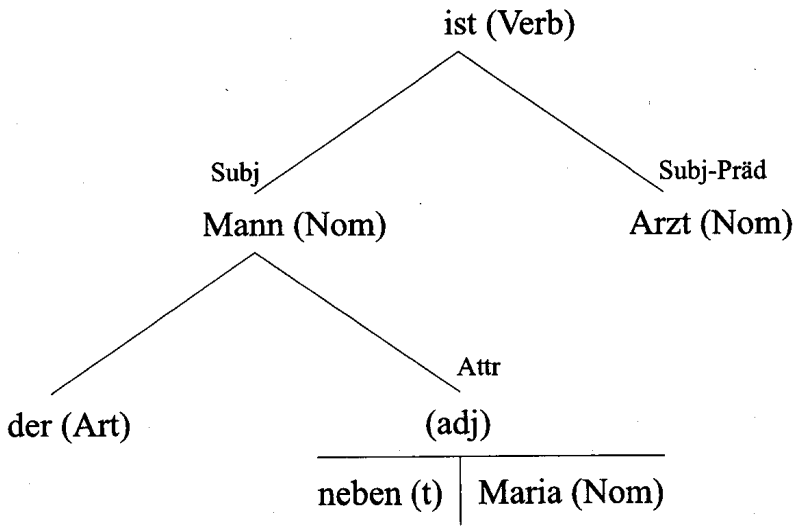
以下の副詞句の例 (19) では、副詞 dort は変換詞なし (ø) で形容詞相当語句 (adj) への変換が生じる。この形容詞相当語句の統語機能は付加語 (Attr) であり、これが名詞 Hotel に依存している[16)]。

(19) Das Hotel dort ist luxuriös.

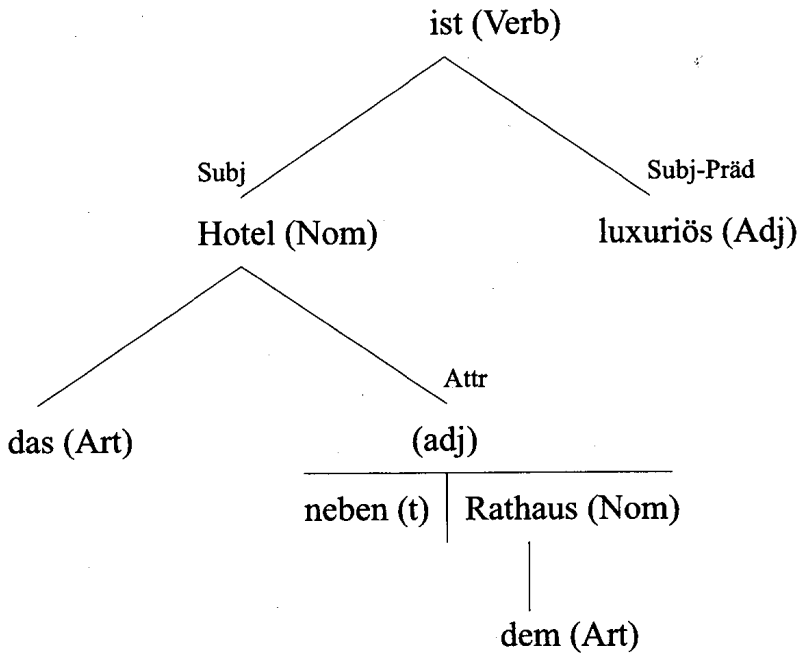


前置詞が、(20) 人を表す名詞、(21) 事物を表す名詞、および (22) 人を表す代名詞と結びついた前置詞句では、前置詞が変換詞として用いられ、名詞または代名詞が形容詞相当語句に変換される。そして、この形容詞相当語句が付加語として名詞 Mann または Hotel に依存している。

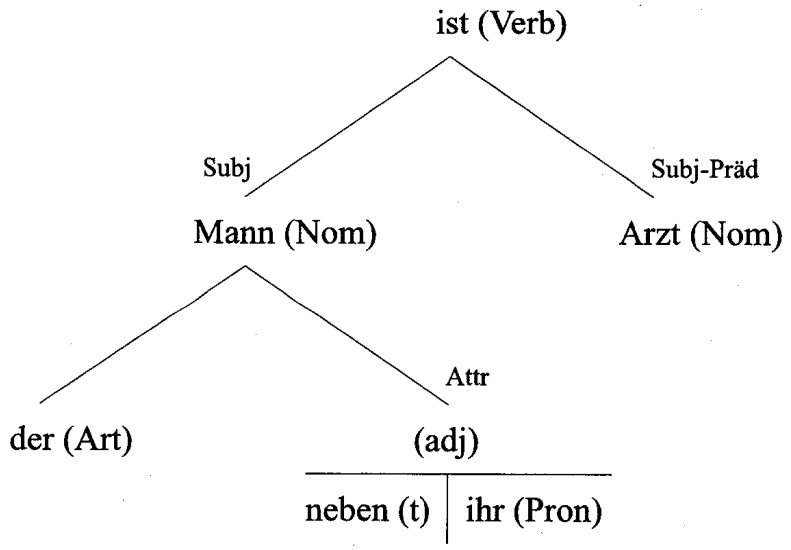
(20) Der Mann neben Maria ist Arzt.



(21) Das Hotel neben dem Rathaus ist luxuriös.



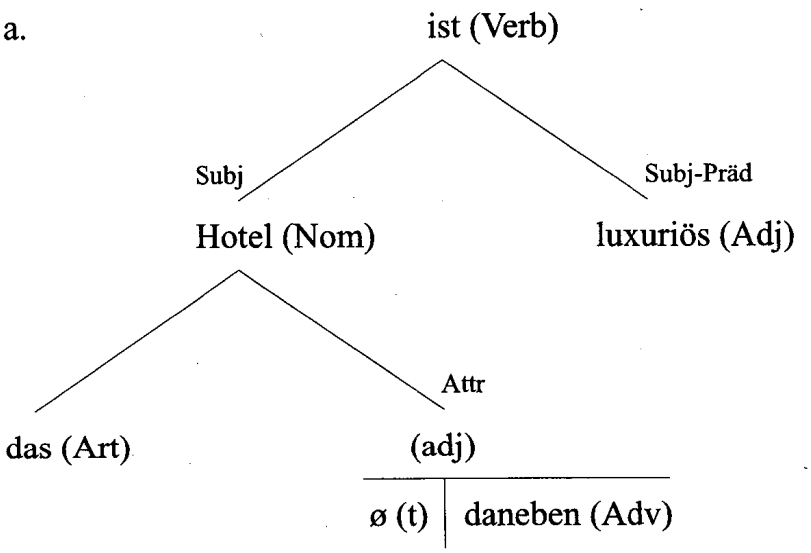
(22) (Der Mann neben Maria ist Arzt. →) Der Mann neben ihr ist Arzt.



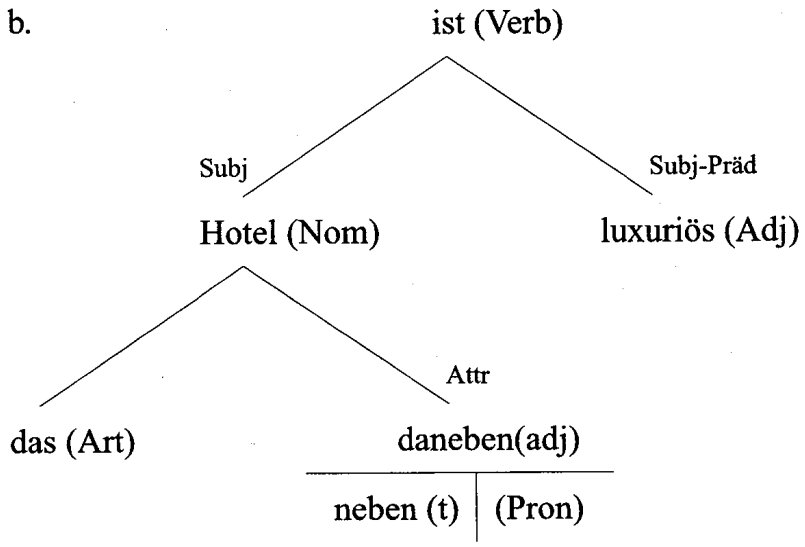
一方、「代名詞的副詞」が用いられた場合には、副詞的規定語の場合と同様に、以下の二つの統語構造が考えられよう。一つは、(19) と同じく、副詞 daneben が変換詞なしで形容詞相当語句に変換され、この形容詞相当語句が付加語として名詞 Hotel に依存している (23)a である。もう一つは、前置詞と人を表す代名詞から成る前置詞句 (22) と同じ統語構造を示す、(23)b である。ただし、具体的な代名詞が文には生起していないため、副詞的規定語の場合と同様に、樹形図では単に (Pron) とのみ記載する。そして、これが neben と結びついて形容詞相当語句に変換され、実際には daneben という形態で生起している。

(23) (Das Hotel neben dem Rathaus ist luxuriös. →)
Das Hotel daneben ist luxuriös.

(23) a.



(23) b.



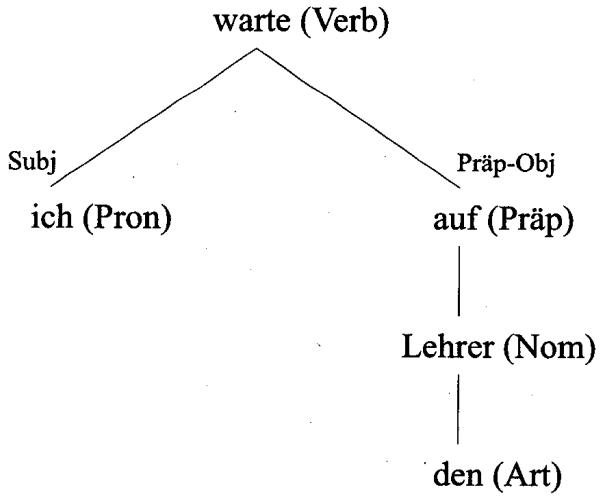
付加語として用いられた、句としての「代名詞的副詞」の場合、副詞的規定語として用いられたそれと同じく、二つの統語構造が考えられ、どちらが正しい統語構造を示しているのかは、現時点では判断できない。

4.3. 前置詞格目的語

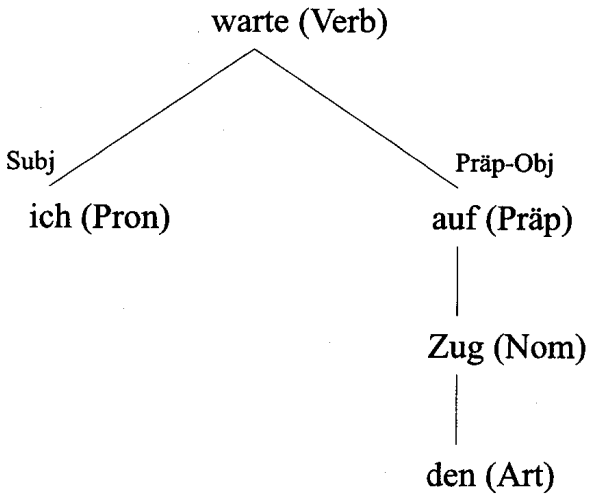
前置詞格目的語に関しては、依存関係文法では、動詞が前置詞句の主要部である前置詞を直接支配すると考えられている[17)]。以下の例 (24) およ

び (25) では、動詞 warten が、前置詞格目的語 (Präp-Obj) として用いられている前置詞句の主要部である前置詞 (Präp) auf を支配し、この前置詞が名詞 Lehrer または Zug をさらに支配するという依存関係にある。

(24) Ich warte auf den Lehrer.

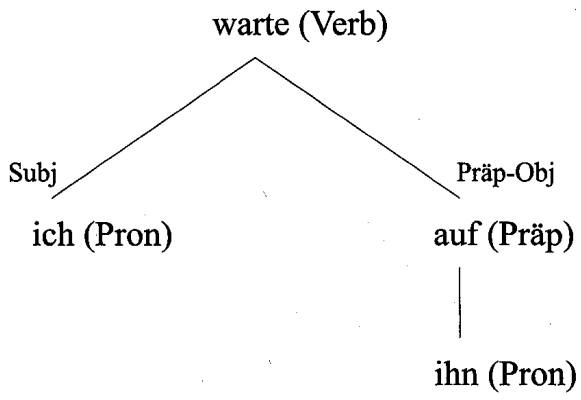


(25) Ich warte auf den Zug.



上述の依存関係は、前置詞と共に用いられているのが人を表す代名詞である場合でも、基本的には同じである。(26) では動詞 warten が前置詞 auf を支配し、この auf がさらに人称代名詞 ihn を支配している。

(26)　(Ich warte auf den Lehrer. →) Ich warte auf ihn.

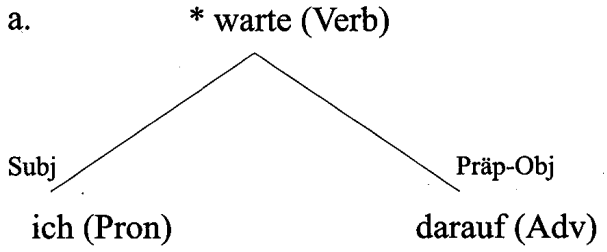


前置詞格目的語の場合も、事物を表す代名詞と前置詞に対しては、「代名詞的副詞」が用いられる。

(27)　(Ich warte auf den Zug. →) Ich warte darauf.

副詞的規定語および付加語の場合と同様に、前置詞格目的語に関しても、二つの統語構造を想定してみる。まず (27)a であるが、この場合、動詞 warten が直接、品詞としては副詞である「代名詞的副詞」darauf を支配することになる。しかし、darauf に対応する auf den Zug は前置詞句であり、ここに前置詞格目的語という統語機能を担う統語範疇として、副詞（句）と前置詞句の二つが混在することになる。しかし、副詞句が担う統語機能に前置詞格目的語はなく、(27)a は (27) の統語構造を正しくとらえていないと判断される。

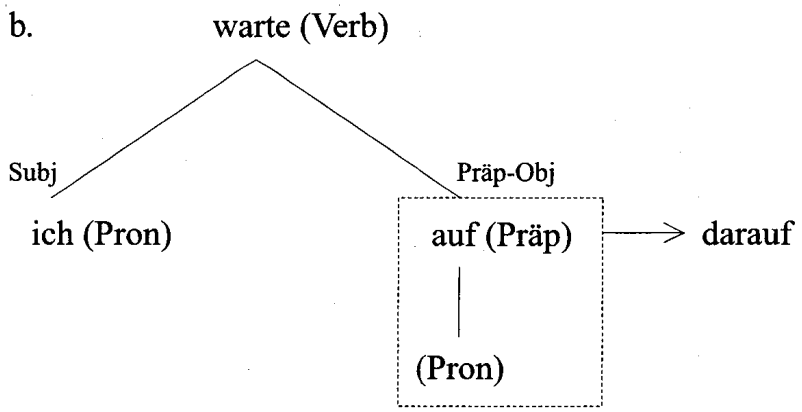
(27)　a.



次に (27)b であるが、こちらでは動詞 warten が前置詞格目的語を要求し、その際、まず warten が前置詞 auf を支配し、次に前置詞 auf が代名詞を支配している。しかし、ここで代名詞は ihn などの具体的な形態で実現され

ない。そのため、本論文においては、(副詞的規定語および付加語の場合と同様に) 樹形図では単に (Pron) とのみ記載し、さらに前置詞と (Pron) の部分を破線で囲むことにする。この破線で囲まれた部分が文で実際に生起する形態が darauf であり、破線の部分と darauf を矢印で結ぶことで、これを明示することにする。

(27) b.



(27)b の統語構造は、(26) のそれと基本的に一致している。(27)a とは異なり、(26) でも (27)b でも動詞が常に、前置詞句の主要部である前置詞を直接支配しており、前置詞格目的語という統語機能も常に前置詞句によって担われている。したがって、(27)b は (27) の統語構造を正しくとらえていると判断できる。

5.「代名詞的副詞」の句範疇

4.3の考察から、前置詞格目的語として用いられた「代名詞的副詞」の句範疇は、前置詞句であると判断される。しかし、その一方で、4.1および4.2で見てきたように、副詞的規定語および付加語としての「代名詞的副詞」の句範疇に関しては、それが副詞句なのか、または前置詞句なのか、判断を保留にしてきた。ここでは、この点に関して考察を進める。

副詞的規定語で考察した例を、以下に再度挙げる。

(15) Der Mann sitzt **neben Maria**.

(16) Das Hotel steht **neben dem Rathaus**.

(17) (Der Mann sitzt neben Maria. →) Der Mann sitzt **neben ihr**.

(18)　(Das Hotel steht neben dem Rathaus. →) Das Hotel steht **daneben**.

(15) の neben Maria および (16) の neben dem Rathaus は前置詞句であり、この Maria を表す人称代名詞 ihr を用いた (17) の neben ihr も前置詞句である。これに対し、前置詞句 neben dem Rathaus に対する (18) の「代名詞的副詞」daneben のみが副詞句であると考えるのには無理がある。daneben も他と同様に前置詞句であると考えれば、そこには統一性が見られるのである。この点は、付加語として用いられた「代名詞的副詞」にもあてはまる。

また、副詞的規定語および付加語として用いられた「代名詞的副詞」は副詞句であり、前置詞格目的語として用いられた「代名詞的副詞」は前置詞句であると考えるよりも、副詞的規定語、付加語および前置詞格目的語のどの統語機能であれ、それらの統語機能を担う「代名詞的副詞」は前置詞句であると考えるほうが、一貫性が見られる[18)]。

以上から、「代名詞的副詞」の句範疇は、副詞句ではなく、前置詞句であると結論づけることができる。したがって、(18) および (23) の統語構造を正しくとらえているのは、(18)b と (23)b である。

6. 結　論

「代名詞的副詞」は、その統語範疇に関して、伝統的な品詞としては副詞であるが、句範疇としては前置詞句であるという矛盾をはらんだ結論が出された。この矛盾は、いかに考えれば解決されるのか？

それは、「代名詞的副詞」を「語」とみなし、語の統語範疇である品詞に分類している点に問題があるのである。その結果、「品詞論のはきだめ」とも称される副詞以外に、「代名詞副詞」を分類できる品詞がないのである。

「代名詞的副詞」[19)]とは、「特定の前置詞と事物を表す代名詞が結合した融合形」であり、「語」ではなく、「句」なのである[20)]。それにもかかわらず、これを「語」として扱い、語のレベルの統語範疇である品詞に分類しているため、上記のような矛盾が生じてしまうのである。「代名詞的副詞」と一般に称される「前置詞と代名詞の融合形」は、あくまでも「句」であり、そして、その句範疇は前置詞句であるというのが、本論文の結論である。

注

1）本論文では da(r)- と前置詞が結合した「代名詞的副詞」を中心的に扱うが、hier- や wo(r)- から成る「代名詞的副詞」でも事情は同じである。以下では特に断らない限り、「代名詞的副詞」とは da(r)- と前置詞の結合を表す。なお、「代名詞的副詞」の定義は研究者によって差異があり、本論文では、それらの中で比較的一般的である定義を挙げた。また、Dudenband 4では、Präpositionaladverb という名称が主に用いられており、別称として Pronominaladverb が挙げられている（Dudenband 4.－Die Grammatik (2005) S. 585)。

2）このような伝統的な品詞の分類に対して、近年では話法詞や（狭義の）不変化詞（心態詞、強意詞、焦点化詞など）を含む分類もある。

3）意味的特徴は、ある品詞の下位分類などに用いられることが多い。例えば、名詞の場合、具象名詞と抽象名詞、副詞の場合、場所、時、様態および因由の副詞などである。

4）以下の分類基準は、Dudenband 4.－Die Grammatik (1984) S. 88 ff., Dürscheid (2000) S. 21 ff., 浜崎 / 乙政 / 野入 (2000) S. 5 f., Hentschel / Weydt (1994), 川島（編）(1994) S. 1112 f., Pittner / Berman (2004) S. 14 ff., Wöllstein-Leisten / Heilmann / Stepan / Vikner (1997) S. 20 ff. などを参考にしたものである。

5）形容詞でも比較変化しない語もある（例：menschlich「人間の」、tot「死んだ」)。また、一部の副詞は比較変化可能である（例：oft － öfter － am öftesten)。

6）動詞が単独で文肢を形成するか否かは、研究者の間でも見解が異なるが、「前域に生起可能」という点が文肢としての条件の一つであり、少なくとも定動詞は単独で文肢を形成するとは言えないであろう。また、動詞が単独で文肢を形成するか否かは、本論文の内容に直接関わることではないので、この点に関してはこれ以上立ち入ることはしない。

7）形容詞のなかには一部格支配するものがある。例えば、ähnlich は 3 格支配であり、zufrieden は（前置詞 mit と 3 格の名詞句の）前置詞格支配である。

8）動詞が単独で文肢を形成するか、形容詞が格支配可能か、副詞が格変化可能かという点に関しては、ここでは－（マイナス）として扱っている。

9）例えば、統語機能「主語」を担う句範疇は「(1 格の）名詞句」である。

10）ここで言う副詞とは、心態詞、強意詞、焦点化詞などを除いたものである。

11）付加語として用いられる副詞は、hier や heute などの場所および時の副詞である。

12）副詞句は述語内容語としても用いられる(例：Alles war **umsonst**.)。しかし、述語内容語として用いられるのはごく一部の副詞であるため、ここでは除外

する。また、Er ist **hier / da / dort.** の sein をコプラ動詞とし、hier などを述語内容語とする見解もある。しかし、この sein は同定関係を表すのではなく、存在を表しており、hier などは述語内容語ではなく、場所の副詞的規定語である。

13) 前置詞句も述語内容語として用いられる（例：Das ist **von großer Wichtigkeit.**）。しかし、述語内容語として用いられるのは一部の前置詞句であるため、ここでは除外する。

14) 動詞は、不定詞の形で説明する。

15) (14) の樹形図における Nom は名詞を、Art は冠詞を、Subj は主語を表す。なお本論文では、Tesnière および代表的な依存関係文法の研究者の樹形図を参考にして、比較的一般的と思われる樹形図の記述方法をとっている。

16) (19) の樹形図における Subj-Präd は主語の述語内容語を表す。

17) Tesnière は前置詞格目的語を考慮していなかったが、その後の依存関係文法では、動詞が前置詞格目的語の前置詞を支配していると考えられている。

18) ただし、統語機能と句範疇は一対一の関係にはない。例えば、副詞的規定語には、副詞句、前置詞句、形容詞句などが用いられる。しかし、前置詞格目的語には前置詞句しか用いられない。

19)「代名詞的副詞」という名称にも問題がある。しかし、本論文ではこれに代わる新しい名称を提案することはしない。それは、これが語のレベルの品詞（の下位分類）としての名称であるためである。

20) この点では、im、ins などの前置詞と定冠詞の融合形に似ている。これらも語としては扱われておらず、したがって、どの品詞にも分類されない。ただし、前置詞と定冠詞の融合形であるため、句としても扱われてはいない。

参考文献

Dudenband 4.－Die Grammatik (1984). Hrsg. von Günther Drosdowski. 4. Aufl. Mannheim.

Dudenband 4.－Die Grammatik (2005). Hrsg. von der Dudenredaktion. 7. Aufl. Mannheim, Leipzig.

Dürscheid, Christa (2000): Syntax. Grundlagen und Theorien. Wiesbaden.

Engel, Ulrich (1988): Deutsche Grammatik. Heidelberg.

—— (1994): Syntax der deutschen Gegenwartssprache. 3. Aufl. Berlin.

Engel, Ulrich / Helmut Schumacher (1978): Kleines Valenzlexikon deutscher Verben. 2. Aufl. Tübingen.

Flämig, Walter (1991): Grammatik des Deutschen. Einführung in Struktur- und Wirkungszusammenhänge. Berlin.

浜崎　長寿 / 乙政　潤 / 野入　逸彦 (2000)：ドイツ語文法研究概論. 大学書林.

Helbig, Gerhard / Joachim Buscha (2001): Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. Berlin, München.

Helbig, Gerhard / Wolfgang Schenkel (1975): Wörterbuch zur Valenz und Distribution deutscher Verben. Leipzig.

Hentschel, Elke / Harald Weydt (1994): Handbuch der deutschen Grammatik. 2. Aufl. Berlin, New York.

人見　明宏 (1992)：相関詞 es の統語論上の位置づけについて. In：早稲田大学大学院文学研究科独文専攻 Angelus Novus 会「Angelus Novus」第20号, S. 60–77.

――――― (1996)：目的語文相関詞 es の Modalpartikel 化について. In：ドイツ文法理論研究会「Energeia」第22号, S. 82–93.

――――― (2007)：依存関係文法における相関詞 es ＋文肢文について. In：愛知県立大学外国語学部紀要第39号 (言語・文学編), S. 325–341.

井口　靖 (2000)：副詞. 大学書林.

川島　淳夫 (編) (1994)：ドイツ言語学辞典. 紀伊國屋書店.

Pittner, Karin / Judith Berman (2004): Deutsche Syntax. Ein Arbeitbuch. Tübingen.

Schumacher, Helmut / Jacqueline Kubczak / Renate Schmidt / Vera de Ruiter (2004): VALBU－Valenzwörterbuch der deutschen Verben. Tübingen.

Tesnière, Lucien (1980): Grundzüge der strukturalen Syntax. Hrsg. u. übers. von Ulrich Engel. Stuttgart.

Weber, Heinz Josef (1992): Dependenzgrammatik. Ein Arbeitsbuch. Tübingen.

Wöllstein-Leisten, Angelika / Axel Heilmann / Peter Stepan / Sten Vikner (1997): Deutsche Satzstruktur. Grundlagen der syntaktischen Analyse. Tübingen.